

相模湾沿岸地域別荘の人々①

『大磯を愛した日本の名士』展

展示期間 平成28年1月6日(水)～12月8日(水)

はじめに

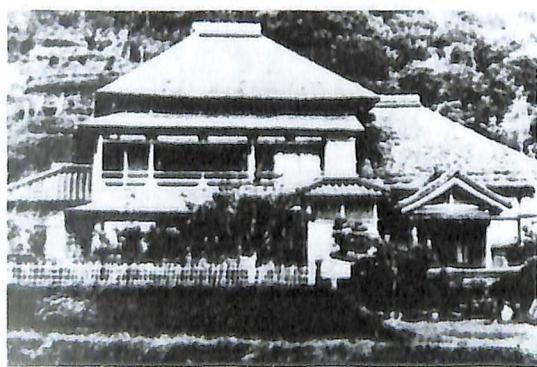
神奈川県大磯町は風光明媚な土地柄で、江戸時代には東海道五十三次8番目の宿場として栄え、また“湘南”発祥の地、そして海水浴発祥の地として知られています。明治18年、陸軍軍医監・松本順により日本初の海水浴場「照ヶ崎海岸」が開かれ、その2年後に東海道線の大磯駅が開設されると、政治家や実業家、文化人などによる別荘建築が一気に広がりました。独特の別荘文化が花開いた大磯には、8人の宰相をはじめ、多くの著名人が住まい訪れました。そんな大磯にゆかりのある名士が、徳富蘇峰と交わした手紙を一同に紹介し、当時の歴史的背景に思いを馳せつつ“明治政界の奥座敷”と称された大磯サロンの一端に迫ります。一方、明治23年に恩師である新島襄を大磯・百足屋旅館で看取り、また明治42年、ハルビンに倒れた伊藤博文最後の外遊を大磯駅頭で見送った蘇峰にとって、大磯の地は深く心に刻まれた、特別な場所でもあります。



鶴龍館



旧伊藤博文邸「滄浪閣」



旧松本順邸



旧西園寺公望邸「隣荘」

旧吉田茂邸が焼失から再建される記念の年、大磯の隣町に建つ当館でのような展示が行えます縁に感謝し、わずか一世紀と少し前には「闇議を開くことができる」とまで言われた大磯の興隆や魅力を、収蔵資料によりお伝えできました幸いです。

(写真は大磯町郷土資料館蔵)

"天下別荘地" 大磯の変遷

期	元号	年/西暦	事柄
別 荘 第 一 期 ／ 黎 明 期	寛文	4年	1664 崇雪が大磯に「著盡湘南清絶地」石碑を建立、湘南発祥の地とされた
	明治	4年	1871 岩倉使節団派遣(英國・ブライトン、米国・ロングビーチなど海浜保養地を視察)
		5年	1872 新橋-横浜間で鉄道開通
		17年	1884 華族令が制定(509名の有爵者が生まれた)
		18年	1885 陸軍軍医総監の松本順、日本最初の海水浴場を大磯に開く
		18年	1885 吉田健三邸(貿易商・吉田茂の養父)建設、吉田茂は幼少期より大磯で過ごす
		20年	1887 旅館・診療所「禱龍館」開業
		20年	1887 東海道線、横浜-国府津間が開通、大磯駅(停車場)開設
		20年	1887 山県有朋邸「小淘庵(おゆるぎあん)」建設
		21年	1888 林董(外務大臣・松本順実弟)邸建設
別 荘 第 二 期 ／ 政 治 の 中 心 舞 台	22年	1889 後藤象二郎(通信大臣)、浅野総一郎(浅野財閥)、大倉喜八郎(大倉財閥)邸建設	
	23年	1890 新島襄、百足屋(むかでや)旅館にて死去(新島八重が大磯での感慨を和歌に詠む)	
	23年	1890 樋山資紀(海軍大将・白洲正子の祖父)、岩崎弥之助(三菱財閥2代社長)邸建設	
	24年	1891 山内豊景(旧土佐藩主家当主)、徳川義禮(旧尾張藩主家当主)邸建設	
	27年	1894 陸奥宗光(外務大臣)邸「聴漁荘」建設	
	29年	1896 伊藤博文邸「滄浪閣(そうろうかく)」、原敬、鍋島直大(旧佐賀藩主家当主)邸建設	
	30年	1897 大隈重信邸建設	
	30年	1897 伊藤博文、本籍を東京の本邸より大磯に移す(亡くなるまで大磯町民として過ごす)	
	31年	1898 三井高棟(三井財閥)邸「城山荘」建設	
	32年	1899 西園寺公望邸「隣荘」建設(伊藤博文「滄浪閣」の隣という意味で)	
別 荘 第 三 期 ／ 実 業 家 ・ 文 化 人	34年	1901 古河市兵衛(古河財閥)邸建設	
	35年	1902 加藤高明邸建設	
	39年	1906 伊藤博文、初代韓国統監に就任	
	40年	1907 統監道(とうかんみち)開通[大磯停車場-滄浪閣方面約500mの里道]	
	40年	1907 山県有朋、大磯より転出(小田原「古稀庵」へ)	
	41年	1908 全国避暑地百選(日本新聞社主催)第1位に大磯、「海内第一避暑地の碑」建立	
	42年	1909 伊藤博文、満州に向け臨時列車にて大磯駅を出発、ハルビンにて暗殺	
大正	44年	1911 井上準之助(日本銀行総裁・大蔵大臣)邸建設	
	2年	1913 梨本宮守正邸建設	
	4年	1915 「大磯照ヶ崎海岸」碑(樋山資紀筆)建立	
	5年	1916 西園寺公望、大磯より転出(興津へ)	
	6年	1917 安田善次郎(安田財閥)邸「寿楽庵」、池田成彬(大蔵大臣・三井銀行常務)邸建設	
	7年	1918 寺内正毅邸建設	
	10年	1921 伊藤博文夫人・梅子、大磯より転出(東京へ)	
昭和	12年	1923 関東大震災発生(震災により多くの別荘が半壊・全壊の被害、別荘数は半減する)	
	4年	1929 「松本順謝恩碑」(犬養毅筆)建立	
	7年	1932 坂田山心中事件	
	9年	1934 「明治天皇觀漁紀念碑」(金子堅太郎筆)建立	
	12年	1937 初代中村吉右衛門邸「秀山荘」建設	
	15年	1940 新島襄没後50回忌に徳富蘇峰らにより「新島襄終焉之地碑」建立	
	23年	1948 岩崎弥太郎の孫娘・沢田美喜により孤児院、エリザベス・サンダースホーム設立	
	30年	1955 ワンマン道路(戸塚道路)全面開通	
	34年	1959 大磯ロングビーチ開業、吉田茂がテープカット	
	42年	1967 吉田茂、大磯邸にて死去	

※大正10年に大磯の別荘所有者は202名に達し、その大半は京浜地区在住者であった

※杏雲堂平塚分院は明治29(1896)年、南湖院(茅ヶ崎)は明治32(1899)年に開設された

※参考資料:大磯町ホームページ

政治家の書簡

へ大磯に住んだ8人の宰相

伊藤博文 天保12年～明治42年(1841～1909) 山口県

長州藩士、政治家。号は「春畝」、「滄浪閣主人」など。松下村塾に学び、幕末期の尊王攘夷・倒幕運動に参加。長州五傑としてイギリスに留学した。維新後は薩長の藩閥政権内で力を伸ばし、岩倉使節団の副使、参議兼工部卿、初代兵庫県知事を務め、大日本帝国憲法の起草の中心となる。初代・第5代・第7代・第10代の内閣総理大臣および初代枢密院議長、初代貴族院議長、初代韓国統監を歴任した。元老。

★伊藤は小田原に別邸「滄浪閣」を構えていたが、小田原に行く途中で立ち寄った大磯が大いに気に入り、梅子夫人の病氣療養も兼ねて明治29年には大磯に居を移す。門には李鴻章から贈られた扁額「滄浪閣」を掲げていた。本籍も大磯に移したため、大磯の滄浪閣が伊藤の本邸となつた。明治36年に四賢堂(石倉具視・三条実美・大久保利通・木戸孝允)を建立。

《解説》

徳川時代三四百年の泰平の世、その苦勞如何ばかりであつたか、感慨を募參にて想ひ。

三百昇平一夢間 英雄事業幾辛艱 松青
沙白駿南路 来弔將軍埋骨山
明治庚戌七月為蘇峰老兄錄旧作 雪朋

山県有朋

天保9年～大正11年(1838～1922) 山口県

長州藩士、陸軍軍人、政治家。長州藩の山縣有朋の子として生まれた。松下村塾で学ぶ。高杉晋作の奇兵隊の軍監として活躍する。戊辰戦争に従軍。内務大臣(初・第2・第3代)、内閣総理大臣(第3・9代)、元老、司法大臣(第7代)、枢密院議長(第5・9・11代)、陸軍第一軍司令官、貴族院議員、陸軍参謀総長(第5代)などを歴任。元老として「山県閣」と呼ばれる官僚・軍人の一大勢力を形成し政界において大きな影響力を持った。

★山県は明治20年大磯に「小淘庵」を建てたが、明治42年に三井高棟に売却し、小田原板橋の古稀庵に移った。

◆書軸

◆書簡 明治35年6月23日付
拝啓 益御清適奉賀候 陳ば明日午後五時赤坂三河屋に而小集相催候
間 御閑暇に御坐候はゞ御来車被成下度奉待候 草々敬具
六月廿三日 博文

徳富猪一郎殿

封筒表 赤坂区青山南町六丁目三十一番地 徳富猪一郎殿
封筒裏 明治卅五年六月廿三日 侯爵伊藤博文

◆絵葉書 旧伊藤博文邸「滄浪閣」(大磯町郷土資料館蔵)

◆書簡 明治35年2月14日付
雲篋落手一読多謝 春寒料峭白雪終に都門は寒威一層凜烈之由に候処先以御壯剛万福敬賀 拙口英向国同盟結約発表に付而是全国人心期せずして一致之歎声を喚起し為國家大慶不過之候 昨今両日之貴説熟読敬服仕候 如來諭我國民動もすれば安心放念兔角小成に安んじ、又は誇揚輕漫之弱点に至ては時々一鞭を加へ警戒しつゝ将来挙国一致耐忍

と強勉とを以て富強之基礎を鞏固なりしめ益進取之氣象を発達せしむるの策を講じ誘導するの外無之事歟と存候。政友会の方針果して御示しの如くなれば意外千万 頗る奇怪之感を抱申候 両帝国同盟締結に付而は各国之情勢に照し 内地之事情を顧み 当局者之痛心焦思實に

非常之事に候 幸いに成効發布後之大勢も亦如此好良之結果を顯したるは國家将来隆盛に向之吉兆と察申候 松方伯も歐洲行相決し数年之宿意を果され御同慶に存候 就而は古谷生も隨行之由好都合之至に候。老生も中旬比には帰京可致合に候處、医師に止められ不得止月末返静養之覚悟に候 草々 時下寒氣御自愛所祈候 敬復

一月十四夜 大磯小淘庵主 朋頓首

徳富蘇峰兄坐下

猶先日浜田生來訪之節は事務三論御惠呈被下深謝之至に候 如例意外

之急情高懃是祈 再白

封筒表 東京京橋区田町国民新聞社 德富猪一郎殿
封筒裏 相州大磯駅、山県朋

西園寺 公望

嘉永2年～昭和15年（1849～1940）京都

公家、政治家、教育者。号は陶庵、不読、竹軒など。フリソスに留学し、帰國後中江兆民らと「東洋自由新聞」を創刊。伊藤博文の憲法調査に同行し渡欧。オーストリア、ドイツ、ベルギー各国の駐在公使を務めた。

帰国後は第2次伊藤内閣、第2次松方内閣の文相兼外相、第3次伊藤内閣の文相となる。明治33年に立憲政友会総裁となり、

39年に内閣総理大臣に任じられ、第1次西園寺内閣、第2次西園寺内閣を組閣した。その後は首相選定に参画するようになり、大正5年に正式な元老となつた。大正8年にはパリ講和会議に首席全権として参加。大正13年に松方正義が死去した後は、「最後の元老」として後継首相の推薦の任にあたり、政界に大きな影響を与えた。

★明治32年に伊藤博文の滄浪閣の西隣に別荘を建て、「躋莊」と名づけた。伊藤博文没後の大正6年には大磯を去り、静岡県興津の「座漁莊」に移った。大磯の土地は後に池田成彬に譲渡した

◆書軸

文章經國
公望題時年
八十八

儀の初代皇帝・文帝が著した『典誥』の一節。「文章經國大業 不朽之盛事」（文翁也國を治むるの）匹敵する大業であり、永遠に朽むることはない。

◆書簡 大正(7)年4月26日付（巻物仕立て）

拝啓 其後は無申訳御無沙汰候處弥御多祥御起居恭賀候 然ば成賓堂叢書第十一編御郵送被下京都に於て接手仕候 每々御芳情感謝の至に候 此地静養中拝讀研究可仕相楽申候 右は不取敢御礼迄如此候草々頓首

四月廿六日

蘇峰先生梧右

徂春好時節に相成候 万一京洛御一遊も候ばゞ御立寄願度奉存候也
封筒表 東京々橋区田町国民新聞 德富猪一郎殿
封筒裏 京都上京区田中町七 西園寺公望

公望

寺内 正毅

嘉永5年～大正8年（1852～1919）山口県
◆絵葉書 旧西園寺公望邸「躋莊」（大磯町郷土資料館蔵）

陸軍軍人、政治家 元帥陸軍大将 ピリケン宰相の異名を持つ。第1次桂内閣では児玉源太郎の後任として陸軍大臣に就任した。以来、第1次西園寺内閣や第2次桂内閣でも陸軍大臣を務めた。韓国統監に就任し、

日本への併合を推し進めた。韓国併合後は朝鮮總督に就任。大正5年、内閣總理大臣を務め、外務大臣や大蔵大臣といった國務大臣を兼任した。

★大正7年に大磯に別荘を建築した。生前国旗の額を大磯小学校に寄贈し、児童たちに愛國の精神を説いたといわれる。

◆書簡 大正(8)年1月25日付

拝復 久潤芳書拝読、益御清穆御軟掌之義欣慶之至に存上候 態々御尋被下候小子病氣も心臓の方は昨今給小康を得候も此際充分療養致、殊に寒氣を避け専心静養千万肝要 平井總監等之切実なる勧告に御坐候間主として其意に従ひ引籠居候次第に御坐候 折角芳書に対し病況御聞に達し度、御厚意拝謝仕候 其中春暖にも相成候はゞ拝暗之榮を得度相樂しみ申候 草々拝具

一月十五日

蘇峰先生侍史

封筒表 東京市青山六丁目三〇 德富猪一郎殿

封筒裏 大磯 寺内正毅

大隈 重信

天保9年～大正11年(1838～1922) 佐賀県

佐賀藩士、政治家、教育者。位階勲等爵位は從一位大勲位侯爵。政治家としては参議兼大蔵卿、外務大臣(第3・4・14・28代)、農商務大臣(第11代)、内閣總理大臣(第8・17代)、内務大臣(第30・32代)、貴族院議員などを歴任した。早稲田大学の創設者、初代総長。

★大磯在住は、明治30年に別荘を構えてから明治34年に古河市兵衛に譲渡するまでの4年間である。現在は古河電工大磯荘となっている。大広間「富士の間」や書斎「神代の間」など、ほぼ当時のまま保存されている。

◆書簡 明治30年1月27日付

拝啓 新年之嘉儀申上候 扱毎度御音信被下奉謝候 今般日本銀行員之一行に御托しひ上御贈与之露製之烟草入及土耳其製のパイプ落手日々愛翫致居候 御厚意御礼申上候 却説新内閣組織以来及昨年彼廿六世紀問題より内閣之失体等言語道断にて實に遺憾に不堪 既に新聞紙上及其他の通信にて御承知之事と奉存候 繼後内閣の威信も地に墮ち候 兄も既に歐州大陸之御旅行も最早一通りは為御済被成候とも存候間 英京へ御引返し之節は加藤氏とも御相談之上一先御帰朝被成候ては如何。先是御礼旁呈寸楮候 草々頓首

正毅

大隈重信

一月廿七日

德富猪一郎殿侍史

時下寒威凜烈折角御自重被成度候

封筒なし。

外交官、政治家。外務大臣(第16・19・26・28代)、貴族院議員、内閣總理大臣(第24代)。伯爵。岩崎弥太郎の長女・春路と結婚したため、政敵から「三菱の大番頭」と皮肉られた。普通選挙法と治安維持法を制定した。

★明治35年1月の大磯の松本順の別荘地を買い取りイギリスから取り寄せたバラの苗で立派なバラ園を作った。

加藤 高明 安政7年～大正15年(1860～1926) 愛知県

外交官、政治家。外務大臣(第16・19・26・28代)、貴族院議員、内閣總理大臣(第24代)。伯爵。岩崎弥太郎の長女・春路と結婚したため、政敵から「三菱の大番頭」と皮肉られた。普通選挙法と治安維持法を制定した。

恭賀新禮 益々御多祥奉賀候 候てバルフォア氏著述 Foundation of Belief の批評を掲タル「国民ノ友」誠に乍御面倒急に一部御取寄之上御恵賛被下候条相叶申間敷哉奉願掛候 実ハ先頃在京ノ一友人に歎し送貢被候處何しへ力見失ヒ探シ当らうず候處少々入用の条出来候間此段相願上候 若し御闇届ヒ下候ハバ幸甚 巴里御逗留も最早餘日無之

不日再御来賀ノ事と御待申上候 鳩山博士衆議院議長に当選の由當人の仕合は勿論衆議院のタメ一毛以下の處最優之議長と被存候 先ハ萬

千御願迄 如此餘拝顔の節に譲ル 頤首

一月四日 倫敦にて 高明

徳富先生 侍史

封筒表 Monsieur I.Tokutomi c/o Legation du Japon Paris

原 敬

安政 3年～大正 10 (1856～1921) 岩手県

外交官、政治家。号は一山、逸山。郵便報知新聞記者を経て外務省に入省。伊藤博文を中心に結成された立憲政友会に参加し、大正 3年立憲政

友会総裁、大正 7年には第 19代第内閣総理大臣に任命される。平民宰相と呼ばれた。東京駅丸の内南口コンコースにて、大塚駅の駅員であった右翼青年・中岡良一に襲撃され、刺殺された。

★原は明治 29年に大磯の照が崎海岸そばの土地に別荘を購入した。病気がちな 13歳年下の妻・貞子にとって大磯の温暖な気候がよいと考えたからだといつである。

◆書簡 大正 5年 3月 24 日付

拝啓時々益々御清康奉賀候 陳ハ今般貴著大正政局史論御恵贈被成下
御芳情奉深謝候 右貴論ハ國民新聞紙上一於いて日々面白く拝見致し
編録及御觀察の鋭利周到なる一深く敬服羅在候次第一之有候 確一本
書ハ現代及将来一回りて時務一志あるもののが参考書たるは申すまで
も之無 小生より改めて賛辞を呈するの必要も無えど奉存候 唯先日
も拝眉の節に一言仕置候通小生の親官關係せしもの又ハ委官承知一付
居候ものに就ては小官愚見を申上て御参考一一致し度点も有之候得共小
生日下の立場よりして其事不相叶他日の機会を待つ之外なきは誠に遺
憾の至に御座候 先は不敢拝謝の意を表し度如此御坐候 草々不

三月廿四日 原敬

徳富猪一郎殿

封筒表 赤坂青山南町六丁目 徳富猪一郎殿 親展
封筒裏 芝公園七号 原敬

吉田 茂

明治 11年～昭和 42年(1878～1967) 東京都

外交官、政治家。東久邇宮内閣や幣原内閣で外務大臣を務めたのち、昭和 21年戦後第 1回総選挙後首相に就任。公職追放となつた鳩山一郎の代わりに日本自由党総裁となる。以後昭和 29年までの間、5度に亘つて政権を担当した。大磯町名譽市民。

★吉田茂は養父・吉田健三が購入した邸宅で幼少期を過ぐ。首相在任中には週末を、退任後には隠棲した。退任後も政治への影響力は大きく、「大磯詣」と称されるほど多くの政治家が吉田のもとを訪ねた。昭和 42年 10月 20日、大磯邸にて死去、享年 89。旧吉田邸はその後西武鉄道の手に渡り、平成 21年の火事による焼失後、現在は神奈川県立大磯城山公園の一部として公開され、邸宅部分は吉田五十八氏の設計図通りに再建中。(平成 28年 1月 6日現在)

◆書簡 昭和 26年 10月 27日付(印刷)

拝啓秋冷の候 恒々御清祥の段慶賀の至りに存じます。陳者 故衆議院議長幣原喜重郎先生が多年我が外交界並びに政治界に貢献せられました偉大な功業を永く後世に伝える記念事業として、今般下名等相謀り、広く寄附金を募集して幣原平和財團を設立し、平和に関する内外の書籍を蒐集し幣原平和図書館を国立国会図書館内に設置するとともに、故人の伝記を編纂する計画を立てました。本事業につきましては貴下の特別の御支援と御協力を仰ぎ所期の目的を達成したく切望に堪えません。就きましては茲に同封の趣意書御高覽の上本事業に御賛同賜わ

り、発起人たることを御承諾下さいますよう御依頼申上げます。

敬具

昭和 26 年 10 月

◆書簡 明治(■)年 11 月 2 日付 (新島襄宛徳富蘇峰書簡に同封)

幣原平和財団設立世話人会

会長 吉田茂

副会長 林譲治

同 佐藤尚武

同 一萬田尚登

徳富猪一郎殿

封筒表 熱海市伊豆山押出 119 徳富猪一郎殿

封筒裏 東京都港区赤坂 1 丁目 1 番地国立図書館内

◆幣原平和財団設立世話人会

会長 吉田茂

副会長 林譲治

同 佐藤尚武

同 一萬田尚登

(幣原平和財団設立趣意書、発起人承認返信葉書同封)

以上 8 人の宰相

◆中島信行 弘化 3 年～明治 32 年(1846～1899) 高知県

政治家。男爵。通称は作太郎。長男は中島久万吉。最初の妻は陸奥宗光の妹中島初穂(明治 10 年死去)で、後妻は女性解放運動家の岸田俊子。土佐国の郷士・中島猪三の長男。少年期に耕余塾へ通う。武市半平太の土佐勤王党に加盟、のちに脱藩して長州藩の遊撃隊に加わり、その後坂本龍馬の海援隊で活躍した。龍馬の死後は陸援隊に参加する。同志社の創設者新島襄に出会い、「日本人を自由の民としたいなら、まずあなた自らキリストを信じて罪の問題を解決し自由独立の人とならなければならぬ」と忠告を受け、明治 16 年に一番町教会で植村正久牧師より洗礼を受けた熱心なクリスチヤンになった。

★明治 31 年、病氣療養のため大磯に別荘を構え、伊藤博文とも親交があった。明治 32 年大磯別荘で病により死去。大磯の大運寺には「長城中島君墓」(伊藤博文書)と刻された墓が夫人・湘煙の墓と並んで建てられている。

◆書簡 天保 15 年～明治 30 年(1844～1897) 和歌山県

紀州藩藩士、政治家、外交官。伯爵。文久 3 年勝海舟の海軍操練所に入り、慶応 3 年には坂本龍馬の海援隊に参加。明治初期に行われた版籍奉還、廃藩置県、徵兵令、地租改正に大きな影響を与えた。また、カミソリ大臣と呼ばれ、伊藤内閣の外務大臣として不平等条約の改正(条約改正)に辣腕を振るった。

★明治 27 年に大磯東小磯に別荘を建て、「聽漁荘」と名付けた。この別荘で外交史『蹇蹇録』をまとめた。

◆書簡 明治 23 年 1 月 27 日付
愈御清福御起居奉賀候 過日御来書にて國民新聞御発足の望にて祝詞

可送予儀恰も少々取紛れ居りて延引仕候處 昨日又上野氏御來訪貴需

不應も失礼と一言別書差上候間可然御取捨奉望候 先ハ右のみ 匆々

不一 中島信行

追伸 先日ハ新島君御逝去ノ報ニ接し嘆惜無記候 其翌大磯へ御見舞申候處既ニ間一合不申御序手ノ節御遺族へ宜しく御伝被下候

封筒表 東京々橋区口吉町四番地国民新聞社にて 德富猪一郎様

封筒裏 横浜 中島信行

モ有之候ハバ、無遠慮御申付被下度候 草々頓首

封筒表 国民新聞社 德富猪一郎殿 親展

封筒裏 東京市麻布区三河台町三十一番地 井上準之助

井上 準之助

明治 2年～昭和 7年 (1869～1932) 大分県

政治家、財政家。日本銀行第9・11代総裁。山本、濱口、第2次若槻内閣で大蔵大臣に就任。貴族院議員。英國・ベルギーに留学。帰国後、横浜正金銀行に入り、頭取を経て、大正8年日銀総裁に就任した。大正12年に山本権兵衛内閣の蔵相となり、翌年貴族院議員に勅選。昭和2年高橋是清蔵相の下で再び日銀総裁となる。昭和4年浜口雄幸内閣の蔵相となり、金解禁を実施。昭和6年に辞任後、民政党総務となるが、血盟団事件で暗殺された。

★井上準之助の長男・五郎の妻・和子は木戸幸一の娘で、現皇后の女官長であった。皇后は度々大磯を訪れ、楽しい時を過いられたといつ。

◆書簡 大正(■)年10月11日付

徳富老舎 十月十一日 井上準之助

拝啓 過日ハ神戸邸ニ於テハ一足先ニ失礼仕り御詫申上候 儲チ日田行ノ件ハ早速各方面ニ申遣ハシ候處 二十一日別府ヨリ日田迄ハ九州

水力会社棚橋君ニ於テ自動車ヲ用意致シ御待受ケ可由様申来候 尚又

日田ニ於テハ広瀬貞治君ニ万事ノ手配ヲ申遣ハシ同氏ヨリハ御来臨ヲ非常ニ感謝致候旨申来リ候 右ノ如ク用意ハ出来候得共御滞在ノ時間ノ余リ一短カキコトヲ今ヨリ遺憾ニ存申居り候 尚其他ニ相当ノ御用

樺山 資紀

天保 8年～大正 11 (1837～1922) 鹿児島県

薩摩藩士、軍人、政治家。海軍大将。伯爵。警視監、海軍大臣、海軍軍令部長、台湾總督(初代)、枢密顧問官、内務大臣、文部大臣を歴任した。

★明治23年に大磯の鳴立川の河口付近に別荘「一松荘」を建てた。その後東小磯に茶室風の家を建て、伊藤博文から「自然亭」と命名された。樺山の孫にあたる白洲正子は新婚時代に夫である次郎と「自然亭」の離れに住んでいた。高麗の高来神社の神額「高来神社」は樺山資紀によるもの。明治34年には伊藤、樺山、町長の尽力で文部省から専門技師を招いて大磯小学校を日本初の理想的近代校舎に建替えた。また大磯海水浴場入口の左側に立つ御影石の記念碑「大磯照ヶ崎海水浴場」も樺山の筆によるものである。(碑の拓本を展示中)

◆展示書簡 明治(38)年4月22日付

拝読 岡山孤兒院え十ヶ年毎年一千円宛下賜之御沙汰有之候旨御通知拝承、難有仕合之至而。就是宮内大臣え挨拶之儀は參集日の節に申出置可申候間、右様御了承可被下候。波羅的艦隊之行動如何に御坐候哉、頗る杞憂之至。向后機密之状報も有之候はゞ為御知被下度

希上置候。拝復如此。々々

封筒表 東京々橋区口吉町四 德富猪一郎殿

封筒裏 相州大磯町 樺山資紀

高橋 誠一郎 明治17年～昭和57年（1884～1982）神奈川県

経済学者、教育者、政治家、慶應義塾大学名誉博士。日本藝術院院長、帝国学士院会員、日本舞踊協会会長、国立劇場会長、東京国立博物館長、第1次吉田内閣の文部大臣等を歴任し、教育基本法・学校教育法の制定に尽力した。浮世絵の蒐集家としても有名。文化勲章受章。

★病弱であったため、大正4年肺膜の良い大磯の山手に山荘（王城山荘）を建てて住んだ。大磯町名譽町民。

◆書簡 昭和32年1月4日付（印刷）

謹啓 貴台には今般本会の趣意に御賛同下され、早速建設基金として金壇千円也の御寄附に預かり誠にありがたく厚く感謝いたえます。 本会も御芳志を体し一日も速に所期の目的達成に努める所存でござります。先は右略儀ながら書中を以て御礼申し上げます。 敬具

昭和32年1月4日 鳴外記念館建設委員会会長 高橋誠一郎
封筒表 熱海市伊豆山押出 德富猪一郎様
封筒裏 鳴外記念館建設委員会会長 高橋誠一郎
德富猪一郎殿

教育者の書簡

新島 襄 天保14年～明治23年（1843～1890）江戸

宗教家、教育者。本名・七五三太。元治元年にアメリカに密航。アンドリュー・神学校で洗礼を受ける。アメリカ訪問中の岩倉使節団に通訳として参加。帰国後、明治8年に同志社英学校を開校し、初代社長に就任。徳富蘇峰は明治9年に入学した。同年新島は山本覚馬の妹・八重と結婚。同志社大学設立のため東奔西走するなか病に倒れ、蘇峰の勧めで大磯に

療養するや田疋屋旅館別館「愛松園」で死去。亡くなる前に、蘇峰は新島の10か条の遺言を口述筆記した。

昭和15年10月、新島襄の門下生が旧田疋屋跡地に徳富蘇峰の筆により「新島襄先生終焉之地」の碑を建立した。（碑の拓本展示中）田疋屋旅館の主人・田代謙吉は大磯町5代田町長を務めた人物で、松本順の支援者でもあった。

◆書簡（葉書）昭和22年12月28日付

昨日は御繁劇中御見送り被下深ク奉拝謝候 着後至テ氣分モ爽快ヲ覺候間 乍憚御休意被成下度 猶人見君一も宣布御鶴聲の程奉希上候
勿々不宣 十二月廿八日 大磯むかでや 新島襄

葉書表 東京々橋区田町民友社 德富猪一郎兄

新島 八重 弘化2年～昭和7年（1845～1932）会津藩

教育者・茶道家・同志社創立者の新島襄の妻。山本覚馬の妹。会津藩砲術師範・山本権八の娘。会津戦争の鶴ヶ城籠城戦では自らスペンサー銃を持ち奮戦。「幕末のジャノンヌ・ダルク」と称される。山本覚馬の元に出入りしていた新島と出会い結婚。同志社大学設立のため新島とともに力をする。日清戦争・日露戦争には日本赤十字社の篤士看護婦として従軍。新島の死後社会福祉活動に人生を捧げた。勲六等正勲章受章。

★大磯には八重の名義として明治23年に購入した小さな土地（神明前）があつたとされる。明治32年に売却されている。展示書簡では、自分が詠んだ和歌は「大磯の岩にくだけし志うなみも玉と可がやく世にしそあれ」だったが、実際に国民新聞に掲載されたものは違う。いずれにしてもよいことですが、どう内容。3月11日の国民新聞に掲載された和歌は「大磯にくだけし波も白玉とかがやく世にしそれしかりけれ」と添削されてあつた。

◆書簡 昭和23年3月12日付

前文御尊免 貴社御新聞に私の和歌御かかげに相成候処 私の和歌は大磯の岩にくだけししなみも玉とかがやく世にこそありけれ 右の通り相認め候と存候得共 ちがへ居申候間 右申上候 しかし何れにて もよろしく候えども 鳥渡申上候 草々 封筒表(黒枠付) 東京京橋区日吉町四番地 国民新聞社御中

封筒裏 新島八重

◆新島襄危篤の電報(大磯百足屋より)

明治二三年一月一三日 午前八時

『イシヤクルニラコバヌ スグイキタコル ハガキノコトタノム』

発信人 ヲヲイソムカテヤ トクトミイチロウ

受信人 エノキサカマチ五パンチ ユアサジロウ マツタジユン一イ

◆国民新聞の挿絵(久保田米庵筆)島襄終焉の挿絵

安田 善次郎 やすだ ぜんじろう 天保9年～大正10年(1838～1921) 富山県
明治・大正期の実業家。安田財閥の創設者。20歳で江戸に出て、丁稚奉公の後、元治元年両替屋安田屋を開業し、明治9年第三國立銀行、明治13年には安田銀行を設立。以後両行を軸に数多くの銀行を吸収合併し、金融業中心の安田財閥を一代で築き上げた。浅野財閥との関係は親密で、同財閥に巨額の投融資を行った。公共事業にも尽力し、晩年は東京大学安田講堂、日比谷公会堂を寄付した。

★浅野総一郎より大磯の土地を譲り受け、第一線を引退後に別荘を建設、「寿楽庵」と名づけた。裏山に「寿楽園」を造る。大正10年大磯の別邸で国粹主義者朝日平吾に刺殺された。

◆書簡 明治40年7月付

物語のこの歌にちなみ、昔の沢らしい面影を残す。景色の良いこの場所に鷗立沢の標石を建て、石仏の五智如来像(釈迦・阿弥陀・大日・薬師・宝生の五仏)を運び草庵を結んだのが始まりである。その後、紀行家と知られ、俳諧師としても有名であった大淀三千風(おおよどみちかぜ)が鷗立庵主第一として入庵して以来、京都の落柿舎、滋賀の無名庵と並び日本三大俳諧道場として現在第二十一世鍵和田庵主へと続いている。(参考:大磯町ホームページ)

◆西行法師(木像)

◆鷗立沢付近絵葉書き写真(大磯町郷土資料館蔵)

◆『大磯勝紀』(長谷川九華)

◆『春畝遺稿』(伊藤博文公伝記編纂会)

◆『震災記録』(大磯警察署編纂) (大磯町郷土資料館蔵)

◆『大磯誌』(富山房)

財界人の書簡

一因の候次第一ニテ株主ハ勿論先生ノ感佩致候處一御座候 依テ右記念ノ

為メ軽謝ノ至リ一候得共 別封ノ粗品進呈仕度候間御受納被下候ハバ本
懐ノ至リ一候 敬具

明治四十年七月

徳富猪一郎様

封筒表 徳富猪一郎殿

封筒裏 安田善次郎

した。趣味人として知られる。

★昭和 8年に御生の座を譲り、大磯にある北家の別荘、城山荘に居を移した。大磯城山荘は奈良薬師寺をはじめとする全国の社寺から集めた古材を建築資材や家具・調度品に用いて建築された。広大な敷地内には、昭和 11年に国宝に指定された茶室「如庵」などが麻布区今井町の本邸から移築された。別荘跡地は現在、神奈川県立大磯城山公園として一般公開されている。

北崎 弥之助

嘉永4年～明治 41年(1851～1908) 高知県

実業家。若崎弥太郎の弟。後藤象二郎の長女・早苗と結婚。2代目総帥として三菱の多角化に尽力。銀行・倉庫・地所・造船などの事業を興した。三菱の総帥の座を甥の久弥（弥太郎の長男）に譲った後に第4代日本銀行総裁となつた。

★弥之助は明治 24年頃大磯駅前の愛宕山を買入れ（約一万坪）、母美和の為に別荘「陽和洞」を建てた。（現・エリザベスサンダースホール）

◆書簡 明治 30年 8月 8日付(黒縁葉書)

拝啓 故伯爵後藤象一郎葬送之節者炎暑無御厭遠路之處態々御会葬被

成下悉く奉存候 右御礼申上度如此御座候 敬具

明治三十年八月八日 親戚 若崎弥之助 大江卓 若山鉄吉 長與称吉
吉田正春

浅野 総一郎

嘉永元年～昭和 5年(1848～1930) 塩三県

◆書簡 大正 4年 11月 13日付

拝啓 時下愈々御清祥之段奉賀候 陳ハ豫之御繁務中恒一邦家之為メ
御乃瘁相成居候旨 天聴一達シ今回御大典一際シ叙勲ノ御恩命一接せ
られ候由御家門の光榮之一過もさる儀と奉拝察 誠に慶賀ノ至一奉存
上候 就てハ師御祝意表彰ノ印迄二粗品呈上仕候間御笑納被下候得ハ
本懐ノ至一存上候 先ハ不右取敢御祝詞申置方々此如御座候 敬具

十一月十三日 三井八郎右衛門

徳富猪一郎殿

封筒表 徳富猪一郎殿
封筒裏 三井八郎右衛門

浅野 総一郎

嘉永元年～昭和 5年(1848～1930) 塩三県

実業家。一代で浅野財閥を築いた。鶴見埋築株式會社（現・東亜建設工業株式會社）を創立し、鶴見で東京湾の埋め立てをはじめなど、京浜工業地帯の形成に寄与し、「日本の臨海工業地帯開発の父」、「明治のセメント王」と呼ばれた。京浜工業地帯の埋立地に鶴見臨港鉄道（鶴見線の前身）を設立し、浅野駅にその名を残す。終点の扇町駅がある「扇町」の地名も、浅野家の家紋の扇に因るものである。札幌のビール事業の払社長に就任。昭和 8年に引退するまで三井財閥の多角的事業発展に君臨

設立した。

★大正初めに大磯北ノ端の別荘を安田善次郎に譲つた後、高麗に土地を取得して別荘を建てる。昭和5年、83歳のとき欧米視察の途中に発病、帰国後、大磯の高麗別荘にて死去。

極月十一日 嘉一郎 拝
徳富先生侍史

封筒表 相州逗子桜山 徳富猪一郎様 親展

封筒裏 根津嘉一郎

◆書簡 大正4年11月14日付(印刷)

恭賀新年併せて倍旧の御高庇を賜はり度 偏に奉希上候 敬具

大正七年一月元旦 東洋汽船株式会社 社長 浅野總一郎

東洋汽船・大洋丸のカード使用

根津 嘉一郎 万延元年～昭和15年(1860～1940) 山梨県

政治家、実業家。東武鉄道など多くの鉄道敷設や再建事業に関わり「鉄道王」と呼ばれた。教育事業も手がけ、大正11年に武藏大学を創立した。大正15年には関東大震災で経営が傾いた徳富蘇峰の「国民新聞」に出資したが、経営方針の違いから昭和4年に蘇峰が国民新聞を退社。

★明治36年に大磯の北浜岳、南浜岳、池田にまたがる約4000坪を取得し別荘を構えた。この場所は旅館松林館の跡地であった。

◆書簡 大正10年(■)月12日付

拝啓 益々御清栄奉賀候 先日ハ折角御尊來を辱らいたし候處碌々御構ひも不申上げ粗略仕候段 平に御海容被下度候 其せつ御覽に供せし幅ものにつき御社新聞紙上に特に御賞讃の記事御掲載被下汗顔の至りに奉存候 実は墨蹟のみにても如何よど存じ畫幅ものも多少御覽に入れ度ど存じ候處其事不能 残念に奉存候 尚其内御縁合御来遊被下度候 又仰せられ候財團法人の件につき野田翁にハ行違面会不仕候へ共一両日中に面会相談可仕候 其の模様は追て可申上候 先ハ右まで 余情期拜(眠)候 草々敬具

◆書簡 大正10年11月23日付
福沢 桃介 慶應4年～昭和23(1868～1938)埼玉県

明治・大正期の実業家。慶應義塾に入塾したのが縁で、福沢諭吉に見込まれ養子となり諭吉の次女・房と結婚した。明治21年アメリカに渡りペンシルベニア鉄道の見習いをした後帰国。北海道炭礦汽船、王子製紙など三井系の会社に勤務。明治39年瀬戸鉱山を設立し、社長に就任。その後実業界で活躍し、幾多の事業を手掛けた。木曽川水力発電の開発に情熱を注ぎ、「日本の電力王」と呼ばれた。

★明治29年現在の東町1丁目に土地を購入、明治35年、渡辺千秋に売却した。

◆書簡 大正10年11月16日付

肅啓 秋冷之候 益々御清穆奉賀候 陳者貴著書態々御郵送被下御厚意に対し深謝仕候 千古不滅ノ大事業之を成功する先生の幸福不堪羨望候過日本會にて偶然拝眉の節先生は小生がショウジンする故に雨が降らぬと仰せられたる様一覚えたるが血の廻りの悪き小生何んだか解らずツイ御返事も不申上其仮に致し置き候處國民新聞に其注釈が載せられ居リハハーと合点致候 先生ハ評判ににやわぬ野暮の男と思召しながらと汗を流し申候 小生ハ木曾川一仕事を致し居る故に蘇水と勝手に號をつけ候 先生は蘇峰なり氣はすかしく候 先ハ御礼申述旁々敬具十六日夜 桃介

封筒表 市内田吉町國民新聞社にて 徳富先生親展
封筒裏 德富先生 瑞北

村井 吉兵衛

文久4年～大正15年（1864～1926）京都市

日本の実業家。明治時代に「煙草王」と呼ばれた。事業を多角化し村井財閥を形成。村井銀行社長。

★大磯には明治35年頃に一町の田畠の内に松林の中に別荘を建てた。邸内にバラや牡丹の花園をつくり、人々を自由に入園せしめ地元の人との交流を図った。

◆書簡 明治（■）年11月23日付

拝啓 今朝懇々電話一通貴紙長樂館記事御知勢被下早速拝見仕り候何共感謝の外無之候 此の品粗末一候共江州百田柿苗木 大磯別荘にて栽培の處 同様の物結実致シ居り候 何卒御風味の程願上候 敬具
十一月廿三日 村井吉兵衛

徳富先生殿 座下

封筒表 徳富先生殿

封筒裏 十一月廿三日 村井吉兵衛

池田 成彬

慶應3年～昭和25年（1867～1950）山形県

戦前の政治家、財界人。第14代日本銀行総裁、大蔵大臣兼商工大臣、内閣参議（第一次近衛内閣・平沼内閣・第2次近衛内閣）、枢密顧問官（東條内閣）、三井合名会社筆頭常務理事（事実上の三井財閥総帥）を歴任。平沼内閣が潰れると、元老・西園寺公望から首相打診があつたが陸軍が阿部信行を推したため立ち消えとなり「幻の首相」となつた。

★池田は大正9年から東小磯王城谷の土地を買ひ、大正10年に家庭園芸場「池田農園」を設立した。大正13年には英國に種苗・メロン栽培など

鍋島 直大

弘化3年～大正10年（1846～1921）

幕末期の大名。肥前国佐賀藩第11代（最後の）藩主。明治・大正時代の政府高官。侯爵。外務省御用掛、元老院議官、宮中顧問官、貴族院議員等を歴任。明治天皇・大正天皇の信頼も厚かつた。次女・伊都子は梨本富士正王に嫁ぎ、四女・信子の娘で孫の勢津子は秩父宮雍仁親王に嫁いだ。伊都子は明治・大正期の美人雑誌でも有名で、嫁いだ梨本富士の間に生まれた直大の孫にあたる方子は朝鮮李朝王世子李垠の妃季方子（イ・バンジャ）となつた。

★大磯の別邸「迎鶴楼」は明治29年頃に建設され、春は大磯、夏は日光で週刊じすのが鍋島家の例年の慣わしだつた。

◆書簡

貴下の本会評議員一推選入

大正3年11月1日

東亞同文会々長侯爵鍋島直大

徳富猪一郎殿

久原 房之助

明治2年～昭和40（1869～1965）山口県

明治・大正・昭和期の実業家。政治家。森村組を経て、明治35年藤田組

を率んだ五島ハ左衛門を總支配人に迎えて1000坪の農園を始めた。昭和2年には「株式会社池田農園」を設立し、我が国の園芸界において種苗の改良と生産に貢献した。

を設立。日立製作所、久原商事などを設立し、久原財閥を築く。昭和3年

年義兄の鮎川義介に実業の分野を委ね、政界に進出。通信大臣、立憲政

友会総裁を務めた。

★大磯では、昭和27年東小磯に土地と別荘を取得。その後淀川製鋼保養所となり、現在はマンションが建つ。

◆書簡 大正3年2月5日付 兵庫県武庫郡より

拝啓 益御清勝奉大賀候 只今中谷氏被來貴著一種御送興を蒙り御懇情千萬難有厚く御礼奉申上候 緩々拝見相樂事と存候就ハ遠からざる内上京拝芝御礼申上候 先ハ不取敢右申述度如此一御座候 早々敬具房之助

徳富老台梧下

封筒表 東京々橋区日吉町 国民新聞社 徳富猪一郎様

封筒裏 兵庫県武庫郡本山村 久原房之助

大正三年一月十六日 宮内大臣伯爵渡邊千秋
徳富猪一郎殿
封筒表 徳富猪一郎殿
封筒裏 宮内大臣伯爵渡邊千秋

徳川 賴倫

明治5年～大正14年 (1872～1925) 東京都

政治家、実業家。徳川茂承の養子となり、紀州徳川家第15代当主。侯爵。貴族院議員、貴族院仮議長、宗秩寮總裁、南美文庫總裁、南美育英会總裁、日本図書館協会總裁、史蹟名勝天然紀念物保存協会会長、十五銀行取締役、日本赤十字社常議員、華族会館評議員、帝国海事協会評議員などを歴任。

★徳川茂承が大磯に購入した土地を買い増し、明治40年(1907)の別荘を新築した。邸内に桜の苗木を百本植え、花見の時期には模擬店を呼び町民を招いて園遊会を開いた。

◆書簡

百濟の故都御探綜之節御惠投之臯蘭寺風光の絵葉書拝讀候難有御厚情之段 奉感謝候 草々拝具

■月十九日 相州大磯の高麗園にて 徳川伏席城拝

葉書表 東京市赤坂区青山南町六ノ三 徳富猪一郎様
葉書裏 高麗園内で採集されたおきなぐさの写真

官僚の書簡

渡辺 千秋 天保14年～大正10年 (1843～1921) 長野県

幕末の諫訪藩士、明治・大正期の官僚・政治家・実業家。号・楓関 伯爵、宮内大臣、鹿児島県知事、滋賀県知事、北海道庁長官、京都府知事、勅撰貴族院議員。大磯には明治30年から1万2千坪の土地を所有し別荘を構えた。

◆書簡 大正3年1月16日付

一時務一家言 式冊

右著述ノ趣ヲ以テ 天皇皇后西陛下へ獻納■出一付傳献取計候此段申入候也遍

文化人の書簡

島崎 藤村 明治5年～昭和18年(1872～1943) 岐阜県

詩人、小説家。本名は島崎春樹。『文学界』に参加し、ロマン主義詩人と

して『若菜集』などを出版。やがて小説に転じ、『破戒』『春』などで代表的な自然主義作家となつた。作品は他に、日本自然主義文学の到達点とされる『家』、姪との近親姦を告白した『新生』、父をモテルとした歴史小説の大作『夜明け前』などがある。

★昭和16年湯河原へ静養の途中、大磯に住んでいた天明愛吉の招待で大磯に立ち寄り、左義長を見学し旅館大内館に泊まる。大磯の新杵（菓子舗）の貸別荘を購入し生活を始めた。昭和18年8月21日、いじで「東方の門」を執筆中脳出血のため倒れ、「涼しい風だね」の言葉を最期に翌22日逝去。享年71。大磯の地福寺に埋葬（土葬）された。大磯町名譽市民。

◆書簡 昭和13年12月27日付

拝呈 多事なりし本年も最早餘日も御座なく候。尙先生にはいよ々々御健勝の趣かけながら御慶び申上候。さて甚だ突然の儀には候得。共今回新潮社にて少年日本文庫刊行の計画有之。その第一巻として国史物語の題目を選び是非とも先生の御執筆を煩はしたしこのことに有之候。右の如き文庫に先生の史筆を煩はすことは恐縮の至ながら吾國少年の前途を思へば明治天皇の御一生を中心にして国史物語を與へたぐと存じ。小生よりむしの御依頼申し上ぐる次第に御座候。猶委敷事は新潮社支配人中根駒十郎氏より御聽取被下度。何卒孫にでも話しかけらるゝ御氣持にてやさしき言葉を書いて頂けるやうなれば、右文庫にとりても光榮の至に有之候。略儀ながら御紹介やら御依頼やらをかねて突然の失禮をかへりみず。この書面差上げ申候 敬具 昭和十三年師走二十七日 島崎生

徳富先生 御座右

封筒表 徳富蘇峰先生 中根駒十郎氏持参

封筒裏 十一月二十七日 東京麹町区六番町十三 島崎春樹

高田 保

明治28年～昭和27年(1895～1952) 茨城県

劇作家、隨筆家。早稲田大学英文科卒。大宅壯一、木村毅とともに『東京日々新聞』に入社、軽妙な雑文を書いた。だが昭和13年には退社し、新国劇の演出家となり活躍する。戦後は『東京日々新聞』に隨筆『ついひょうたん』を連載。軽妙な文体ながら、「天皇制」「再軍備」などの政府の方針に反対する論を展開。「昭和の巣鴨縁蘭」と称えられた。他に『とばした紙鳶』『トスナキアの娘』『トルピドス』など。

★昭和18年「いとう句会」仲間の内田誠（明治製菓宣伝部長）の別荘に移住。句会仲間は16名で、徳川夢声、滝澤秀雄、川口松太郎、堀内敬三、久米正雄等であった。昭和24年には東小磯の家（旧島崎藤村宅）に引つ越した。その後現高田保公園の真下の土地4百坪を買い建築士。谷口吉郎に設計を依頼したが家の完成を待たずして昭和27年亡くなつた。近くの坂田山にある高田公園には谷口が設計した高田保の墓がある。墓碑には「海の色は 日さしで変わる」と刻まれている。大磯では社会教育に力を尽くし、教育委員長も務めた。

◆書簡 昭和(■)年5月4日

御清福大慶に奉存候。過口ハ突然無遠慮の申出幸ひに御尊諾を得。お蔭にて迂生町囃を全うしたる段奉深謝候。本日石井君に托し紙箋御手許にまで御届申上候。粗質到底御芳染に値せざる恐入候へども昨今之事故御仁愛下可被下願上候。なほ今朝眞鰐入網其節御笑約に従ひ併せて御覽に入れ申候。御意に召さば幸甚に御座候。早々拝布 五月四日 高田保 拝

蘇峰先生 台下

封筒表 徳富先生台下

封筒裏 高田保

安田 鞏彦
やすだ ゆきひこ

明治 7年～昭和 53年(1884～1978) 東京都

大正～昭和期の日本画家。本名・新三郎。前田青邨と並ぶ歴史画の大家で、青邨とともに、焼損した法隆寺金堂壁画の模写にも携わった。「飛鳥の春の額田王」「黎明富士」「窓」は切手に用いられた。良寛の書の研究家としても知られ、良寛の生地新潟県出雲崎町に良寛堂を設計した。また自らも皇居新宮殿千草の間に書、『万葉の秀歌』を揮毫した。

★大正3年大磯に移住。弟子である小倉遊亀も一時期大磯に住んだ。墓所は大磯の大運寺。大磯町名誉町元。

◆書簡 昭和 21年 8月 15日付

拝啓 其後は御疎遠を相重ね居候 暑氣酷しき折柄御起居如何に被為在候哉 御商疾の方もいかがにおはしまし候や奉伺候 常々御案内申上候ながら日々の仕事に追はれ御無沙汰に相重ね申訳無之次第に御坐候山中にて数々の御懇情に浴し懐かしき思出もさのむの如くにおほえ候處はやくも一周年を経 万感相到り候 殊に八月十五日を迎へ先生の御胸裡いかは可りと拝察に不堪候 先頃たまはりし御書度々拝讀致し深く銘胆致居候 世情まことに迷昧日本の裸像はさびしき限りに候然しながら若き人の中にはたのもしき心可けの人も少からぬをおぼえ文化日本再建の曙光を見る■ 一日も早急に翫望致居候 先生には深く深く御自愛被下度御健康を切に祈念致候 諸首

八月十五日 安田 鞏彦

徳富蘇峰先生 玉几下

封筒表 静岡県熱海市伊豆山押出 德富蘇峰先生
封筒裏 神奈川県大磯町東小磯四〇三 安田 鞏彦 八月十五日

初代中村吉右衛門 明治 19年～昭和 29年(1886～1954) 東京都

明治末から昭和にかけて活躍した歌舞伎役者。屋号は播磨屋。定紋は揚羽蝶、替紋は村山片喰。大向うからの「大播磨」(おおはりま)の掛け声で知られた。俳句を趣味とし、高浜虚子の門弟。蘇峰は夫人同伴でよく歌舞伎鑑賞に出かけ観劇にした。歌舞伎界初の文化勲章受章。

★昭和 12年大磯東小磯に別荘「秀山荘」を構え、近くに住む友人の安田 鞏彦と親しく付き合つた。

◆展示書簡 昭和(■)年 12月 26日

御手紙ありがとうございます 私に取りましてもなつかしい夢物語でし
ぞいまして御厚志のほどありがとうございます

おもしろい夢物語春を待つ

御寒を御うとい遊びしますように 御奥様によろしくお願い申し上
ます

先生 吉右衛門

封筒表 热海市热海古屋樂閑荘 德富先生
封筒裏 東京市牛込区若宮町三十一 吉右衛門

大磯の碑（拓本）

◆明治天皇觀漁紀念碑（建立地・北浜海岸堤防沿い）

（碑前面）明治天皇觀漁紀念碑（昭和9年建立・金子堅太郎筆）

建碑由来碑

明治天皇、京都より東京へ行幸の途次、當驛の本陣小島才三郎方に蹕を駐めて行在所に充て、内侍所と鳳輦は神明神社境内の假舍に納め、更に板輿に御し此處に幸して蛋の網引を清覽し給へり。網の磯に懸りしを外さんとて、数十の漁夫の海中に出没する姿態、又裸體の漁夫が魚の躍れる水槽を提げ、一斉聲を放て御前咫尺に進む様、天覽新しく御意に適ひて龍顏殊に麗しく璽に御菓子賜ひたり。實に明治元年十月九日なりき。今茲、大磯町は此無上の光榮を石に刻み、聖蹟に立てて永へに傳へんとする。臨時帝室編修局總裁正一位伯爵金子堅太郎氏は、町民の請を容れて題字を揮毫せられ、縣は此举あるを聞き、百方經營を助けて竣工せしめられたり

昭和九年一月下澣 朝倉敬之謹誌并書

大磯の大恩人・松本順

順天堂大学の創設者・佐藤泰然の子（次男）に生まれ、長崎で蘭医学を学んだ松本は、幕府の奥医師として將軍徳川家茂の侍医を務めた。維新後の明治4年、山県有朋の誘いで初代陸軍軍医総監となる。その際に名前も「良順」から「順」に改める。

- ・蹕（さきばらい）||天皇の行幸の車
- ・行在所（あんざいしょ）||天皇の巡幸中の仮の御所
- ・蜋、蛋（あま）||漁夫
- ・御前咫尺（せせき）に進む||天皇の御前間近に進み出る
- ・龍顏||天皇のお顔
- ・百方經營を助け||全面的に事業援助して

◆新島襄終焉地碑（建立地・国道一号線沿い）

（碑前面）新島襄先生終焉之地 德富正敬

（碑裏面）新島先生永眠五十周年に際シ門生建之 昭和十五年十月 蘇峯徳富正敬書 石ハ先生故郷碓井ノ産ニシテ半田善四郎君ノ寄贈ナリ

昭和15年、新島襄50回忌に建立されたもの。碑は建立当初南向きに据えられていた。

◆大磯照ヶ崎海水浴場の碑（建立地・国道一号線沿い）

（碑前面）大磯照ヶ崎海水浴場

（碑側面）大正四年五月 華山筆
大正4年建立・樺山資紀の筆による

転地療法を勧め、大磯の避暑地・避寒地としての著しい発展に貢献した。

町民は明治25年、やせな松本に感謝の証として1,000坪の別荘用地を用意し寄付した。今でも、松本と関わりのあった旅館や菓子舗、書や扁額などが町内の到處といへるに残されている。明治5年岩倉使節団に参加した林董（外務大臣）は実の弟で、妙大寺にある松本の墓碑名は林の筆による。号は蘭馨、樂痴。爵位は男爵。

◆『海沿要覽』(司馬亮太郎・松本順)

松本順が加筆する『海沿要覽』(明治21年発行)によると、明治の海

水浴は、現在の温泉療法のようではござれなかったようだ。

著書の中に次のような海沿法が掲載されている。

・海に入る時には伏せて頭からはず塩水をかぶり、波は背中や側面で受力流す。)

- ・海浴は一日3～5回、水中に30・40分が適宜とする。大磯浜の海水は夏秋時は27度前後なので浴者の体温を奪い過ぎることがない。
- ・浴後肌に塩分が残るのを嫌い、水で洗い流す人がいるが塩は害ではなくむしろ効果がある。

◆松本順肖像(写真・個人蔵)

◆旧松本順邸(写真・大磯町郷土資料館蔵)

林董 嘉永3年～大正2年(1850～1913) 千葉県

父は佐倉藩の蘭方医佐藤泰然。松本順の弟。幕府御殿医林洞海の養子となる。慶應2年に幕府留学生としてイギリスに留学。帰国後、箱館戦争に参加し、捕らえられる。明治4年に明治政府に出仕し、工部省、香川県、兵庫県知事等を歴任し、24年外務次官となる。その後、駐露公使、駐英公使となり、日英同盟の締結に尽力した。第1次西園寺内閣で外相、

◆書軸
個人藏

哲人知幾、誠之於思。志士厲行、守之於爲。順理則裕、從欲惟危。造次克念、戰兢自持。習與性成、聖賢同歸。

◆額入り手製風呂敷(個人蔵)

《解説》

欲を無くすのは心の工夫であり、心法である。心の工夫は昔からあつたものであつて、克<口>復礼や孔子の業明ではなく、先王の遺訓である。アーリド、宋儒が心法を書つるのは何も可笑しなことではない。學問の手掛りは克<口>復礼に帰着する。

世間を睨み下ろす、働くがねば生きていけ行かなの意。世の中せぬるのへりま
し悪べどもかうり続々流行狂歌のひとつ。

◆蘇峰から吉田茂首相への提言（昭和27年8月30日付）

昭和26年9月、サンフランシスコ講和条約が締結され、第3次吉田内閣の国内人気は頂点に達した。（内閣支持率は世論調査で58%）

そうした中、吉田花道論とともに、公職追放解除の鳩山一郎を首相に押す機運の高まりを察した吉田は、昭和27年8月28日、衆議院解散に打つてである。（抜き打ち解散）これを受け、鳩山と懇意の徳富蘇峰は古巣の毎日新聞に筆を執った。

この選挙により、吉田の自由党は辛うじて過半数を獲得したものの、大きく議席を減らした。この結果は、以降の「バカヤロー解散」や「造船疑惑」などと共に、昭和29年12月、吉田内閣が總辞職する契機のひとつとなつた。時の総理・吉田茂に対し、老境の蘇峰が国民の本心を代弁したもの取れるこの手紙には、国会軽視の姿勢など吉田批判が連綿と続く。同内容の記事が新聞に出るその前に届けられた手紙に、ワシマンの名を欲しい仮にした当時の吉田がどう向き合つたのか、興味が尽きない。

吉田首相宛 手控え 昭和二十七年八月三十日

日本国民ノ一人
トシテ吉田首相
ニ一言ア呈ス

個人的物欲ノ淡泊

ナルコト等ハ其ノ長処

デアロウ

休戦後ノ首相トシテハ

幣原片山芦田ノ三

氏ニ比シテ一頭地ヲ抽ニテイル

外交上ニハ兎も角も政
治上ニ於テハ全然素人
テアル。時ト共ニ進歩
セスシテ退歩シテイル。

君ノ取柄ハ硬骨ナルコト
正直ニシテ黑白明白
ナルコト

解得セサルノ人ナリ 独裁者ノ能力ナクシテ

独裁者タラソコトヲ
期スルモノナリ

人間尊重テアル。
然ルニ君ハ人間尊重ヲ解セサルモノニ似タリ

君ハ喜フモノト共ニ喜

フコトヲ知ルモ 悲シムモノト

共ニ悲シムコトヲ知ラス

大磯邸前ニ

日比谷公会堂ニ他国抑

留者遺族ノ会合一

顔ヲ出ササル力如キハ其ノ

尤モ昭著ナルモノテアル

然ルニ君ハ党務モ國務モ他ニ任シ

獨り山中ニアリテ愉想

シティル 君力吉

田内閣ノ參謀ナラハ

尚可ナリ 吉田内

閣ハ吉田ニヨリテノ

内閣テハナイカ

特ニ今回ノ解散ノ方

法ニ到リテハ言語

同断沙汰ノ限りテ

レヲナス。

ハーネル ヒットラー
ノ如キ亦々然り然モ
是レ悪例ナリ。

桂首相ノ如キハ世上ニハ官僚的政治家ノ標本トナス
然モ彼ハ議会ニ出席シタルハカリテナク
總テノ閣僚ニ代リテ攻撃ノ矢面ニ立テリ
閣僚力桂ヲ救フ以上ニ桂ハ閣僚ヲ救フタリ
然ルニ君ハ党務モ國務モ他ニ任シ
獨り山中ニアリテ愉想シティル 君力吉田内閣ノ參謀ナラハ
尚可ナリ 吉田内閣ハ吉田ニヨリテノ内閣テハナイカ
特ニ今回ノ解散ノ方法ニ到リテハ言語同断沙汰ノ限りテ

アル。他党ハ愚力自
 党マテモ出シ抜キ
 解散シタル力如キ
 卑怯千百 横暴至
 極ト云ハサルヲ得ス

 君ハ小事ニ於テハ兎
 も角も大事ニ於テハ
 間違ナシトノ信用
 アリキ 然モ再軍
 備問題ノ如キハ曖昧
 糊塗此ノ一点ニ於テ
 ハ寧口芦田氏ノ正々
 堂々其ノ所見ヲ
 開陳シタルニ対シ漸
 惶ノ至リト云フ可キテアル

(筆草稿・手控え 巻紙 墨書 20×
 278 cm)
 昭和廿七 八月三十日
 蘇叟九十

軍人ハ戦場ニ斃
 ト 政治家ハ政務ニ斃
 ル鳩山氏ニシテ自ラ
 死ヲ決シテ起ツト
 云ハ何ノ顧慮ヲ
 要セんヤ

- ◆写真・絵葉書拡大パネル(大磯町郷土資料館蔵)
 - ・袴龍館(絵葉書)
 - ・大磯小よぎ海岸(絵葉書)
 - ・大磯停車場(絵葉書)
 - ・大磯ロングビーチ(写真)
 - ・花水川付近(絵葉書)
 - ・夏の大磯町(絵葉書)
 - ・大磯海水浴富士遠景図
 - ・大磯海水浴場開設50周年記念ポスター(1階に展示)
- 参考文献**
- ・『コンサイス日本人名事典(第4版)』(株三省堂 平成13年)
 - ・『大人名事典』 平凡社 昭和28年
 - ・ 大磯観光協会HOME PAGE
 - ・『海辺の憩い 湘南別荘物語』島本千也

末尾となりましたが、今回の展示に關して以下の方々にご協力いただきましたので以下に謝意を表します。

潮田洋一氏、大磯ガイドボランティア協会、大磯町郷土資料館、大磯町役場、学校法人同志社、憲政記念館、壱外館、竹越起一氏、山県有朋記念館、山本陽一氏(五十音順)

ハ 選氣以前ニ鳩山
 氏ニ總裁ヲ讓ルニ
 若力ス 鳩山氏健
 康問題ハ鳩山氏
 自身ノ問題テアル
 鳩山氏ハ自カラ其
 任ニ堪ルコトヲ明言ス

平成28年2月3日発行

編集 塩崎 信彦 宮崎 松代

発行者・発行所 (公財)徳富蘇峰記念塩崎財団 代表理事 高野 信篤
 〒251-0123 神奈川県中郡一宮町一宮 605

TEL 0463・71・0266 Fax 0463・71・0677